

第17回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



高校生の部 文部科学大臣賞 受賞作品

『和の継承者として』

滋賀県

近江兄弟社高等学校

三年 小西 琉偉

和の継承者として

近江兄弟社高等学校 三年
小西 琉偉 (こにし るゐ)

「和菓子」「和紙」「和服」。日常のさまざまな場面に顔をのぞかせる『和』という一文字。しかし、この『和』を単に「Japanや Japanese style」と訳すだけでは、その奥にひそむ響みや魂までは伝えきれないのではないか。私はある出会いを契機に、この『和』の本質について静かに思いを巡らせるようになった。

高校二年生の夏、私は「トピタテ留学ジャパン」のプログラムに参加し、国費留学生としてマルタ共和国に渡った。留学の目的は、日本の伝統文化を世界に発信することだった。

マルタ留学で印象に残っているのは、語学学校の先生方に頼み込み、空き教室を借りて実施した「書道ワークショップ」だ。習字を教えることで、日本の『和』の精神がより直感的に世界に伝えられると考えたからだ。半紙に筆を走らせる時間は、単なる技術習得ではなく、心を磨く儀式のようだった。教室中に立ち込める墨の香り、筆先に神経を集中させる瞬間、一文字一文字に自らの意志と心の揺らぎを重ねていく。

特に印象深かったのは、リビア出身の青年ハフッドの姿である。彼は何枚もの半紙に向かって、力強く、かつ丁寧に筆を運んだ。選んだ文字は「平和」。リビアでは、一〇年以上も内戦が続き、未来を奪われる子供も少なくない。そんな故郷の現実を静かに見つめながら、彼は「平和」という二文字に祈りを込め、一筆一筆に願いを託していたのだろう。「ルイにも一枚あげるよ」と差し出された「平和」を、私は受け取った。国も歴史も文化も異なる私たちを、確かにつなぐものがそこにあった。軽はずの半紙が、驚くほど重く感じられた。

ワークショップの後、多くの生徒が「今日は日本の文化に触れられて楽しかった」と笑顔を見せてくれた。その瞬間、日本人としての誇りが胸に湧き上がった。自国の文化を通して人の心と響き合う喜びを、これほど鮮やかに感じたことはなかった。

帰国を控えたある日、私は自分の書いた習字の中から『和』の一文字を選び、留学生生活を支えてくれたホストマザーのグレイス婦人に贈った。彼女はその文字をしばらく見つめ、やわらかな声で尋ねた。

「この文字は、どんな意味なの？」

私は言語化に戸惑った。単に Japanese style と説明するには、あまりに深い意味を抱えているからだ。少し間を置き、私は慎重に言葉を選んで答えた。

「この言葉は、調和を大切にしている日本の心を表しています。社会や自然、人々あらゆるものが互いに寄り添い、尊重し、違いを認め合いながら共に生きる。そんな祈りが、この一文字には込められているのです。」

グレイス婦人は再び筆跡を眺め、目元をやわらかく緩めた。

「このたった一文字に、それほど大きな願いと信念が込められているのね。なんて美しい日本の精神なのかしら。」

そう言って、彼女は『和』を家のいちばん目につく場所に飾ってくれた。その姿を見たとき、私は言葉では言い尽くせない喜びと、日本語に潜む奥深い魅力を同時に感じ取った。

帰国後、私は『和』についてさらに深く考えた。『和』とは単なる表面的な仲良しや争いの回避ではない。対立を無視することなく、対話によって差異を織り合わせ、新しい調和を

つくる能動的な営為。それこそが『和』の本質である。書道における「張り」と「緩み」が示すように、調和には弛緩と緊張が伴う。筆を運ぶとき、静けさと力強さが共存してこそ、初めて真の「美しさ」が生まれるのだ。

情報や人々の往来が増す一方で、社会の分断が際立つ現代社会。その中で平和を育むために、『和』の実践はますます重要である。日本の精神と文学を世界に広めたドナルド・キーンはこう語っている。

「日本が平和であるために、日本人は日本文学をもっと真剣に受け止めなければならぬ。私は改めて思う。世界が探し求める平和への道は、日本の『和』の精神の奥底に、たしかに息づいているのだと。現代を生きる私たちは、『和』を礎に、紡がれてきた言葉や文学と向き合い、その精神を受け継いでいかなければいけない。

また、書道という身体を伴う行為は、この『和』の習得という観点で大きな意味を有している。書道とは、言葉だけでは届かない領域に触れ、一文字に宿る祈りや信念を自らの内に刻む行為だからだ。そこにこそ、目に見えぬ魂の発露があるのではないだろうか。

部屋に飾られた八フツドの「平和」の文字を見るたび、あの日の彼の祈りが鮮明に蘇る。遠く離れた土地であっても、平和への願いは、今でもつながっているのだ。

伝承とは、形だけを受け継ぐのではなく、紡がれてきた精神を心に宿すことだ。それこそが、『和』を継承する私の責務である。私はマルタ留学を通して確かに「和の精神」を世界に伝えることができた。そして、これからも日本の伝統文化を世界に発信し、日本の一文字一文字を心を込めて紡いでいきたい。